

5 エッセイの読解問題

- (41) 筆者が初めて飛鳥に乗ったのは \_\_\_\_\_ からである。 第1段落2~3文目
- (a) 無理やり連れて行かれた (b) もう一度船旅をしたかった  
(c) 船上でいくつか講演するよう頼まれた (d) 世界一周旅行をするために貯金していた
- (42) 筆者が「よろこんだ」のは \_\_\_\_\_ からである。 第1段落最終文
- (a) 船旅が好きだった  
(b) 40年間どこにも旅行したことがなかった  
(c) 飛行機に乗るのが楽しかった  
(d) 飛行機に乗って海を眺めるのが好きだった \*aboard : (船・航空機・列車・バスなどに)乗って(副詞)
- (43) 筆者がニューヨークから出発したときのことを覚えているのは \_\_\_\_\_ からである。  
第2段落3文目
- (a) メキシコに行くことでわくわくしていた  
(b) それまでにない視点で生まれ故郷を見ることができた  
(c) 波に感動した  
(d) 明かりの反射がいつもより輝いて見えた
- (44) 筆者が \_\_\_\_\_ ことができることについて、自分の幸運を「気まずい」と感じていた理由  
第3段落最終文~第4段落1文目
- (a) 邪魔されることなく研究する (b) たくさん旅をする  
(c) 「明治天皇記」を読む (d) 旅をする友達がいる
- (45) この年の航海の中で筆者が気に入ったのは \_\_\_\_\_ 第4段落4文目
- (a) 景色を見ること  
(b) 読書すること  
(c) 電話で話すこと  
(d) 日本語を学ぶこと
- (46) 間違っている答えを選びなさい。筆者によると、自分が学んだ日本語の「おかげで」 \_\_\_\_\_  
することができた。 第4段落最終文
- (a) 戦争についてより深く考える  
(b) タリンの都市を訪れる  
(c) 飛鳥に乗って旅をする  
(d) 美しいサンクトペテルブルクを見る
- (47) アンダーラインを施した文章は、筆者は \_\_\_\_\_ ことを示唆している。
- (a) 日本への興味が薄れ、それ以外の国々への興味が強くなっている  
(b) 他の国々に比べ、日本への興味がはるかに強い  
(c) 日本への興味は変わっていないが、他の国々にも興味を持っている  
(d) 日本にも他の国にも興味はない
- (48) 「これらの結びつきを断ち切る」とされている部分の「結びつき」とは \_\_\_\_\_ の間の関係  
のことである。 第5段落2文目
- (a) 筆者の人生と日本 (b) 世界と日本 (c) 筆者と友人たち (d) 旅行者と世界

(49) 筆者が「日本はいつでも私の最後の目的地なのだ」と書いた意図は \_\_\_\_\_ ということである。

- (a) 彼が参加する全ての航海は日本で終わる
- (b) 彼は日本以外の国々とのつながりを断ち切りたいと思っている。
- (c) 彼は他の国よりも日本を旅行することの楽しむ
- (d) **彼は常に日本と強く結びついている**

(50) このような文章を \_\_\_\_\_ という。

- (a) 日記
- (b) 戯曲
- (c) 小説
- (d) **エッセイ**

この15年間、自分の知らなかった国々に旅行してきたが、日本の巡航客船飛鳥に乗ることが多かった。1998年、<sup>(41)</sup>私は飛鳥が世界一周航海をしている途中、2週間乗船するよう誘われた。することといえば、乗船中、日本語で2、3回講演することだけだった。もちろん、喜んで参加した。40年間、船で旅をすることはなかったのだ。<sup>(42)</sup>飛行機に乗っていると、船で旅をするほうがどれだけ楽しい経験だったかを思い出すことがよくあった。

飛鳥での初めての航海は、ニューヨークから西インド諸島を抜けてパナマ運河に至り、さらにそこからメキシコへと向かう旅だった。霧深い夕暮れ時にニューヨークを出発したのが特に印象深い。<sup>(43)</sup>私はニューヨークで生まれ育ったが、日が暮れてから海の方から無数の街の明かりを眺めたことはなかったのだ。

それ以来毎年、およそ2週間ずつ飛鳥に乗船している。ここ数回の航海では日本文学だけでなく、個人的な趣味もあってオペラについても講演している。<sup>(44)</sup>夏には太陽が沈むことのないノルウェイの最北端の地へも、すばらしいオペラ座が魅力的な、アマゾン川沿いにある赤道直下のマナウスの港へも訪れた。

自分はずっと幸運だったのだということはわかっているが、普段はこの運のよさがきまり悪くて、それほど運のよくない友人には自分の旅についてなるべく話さないようにしている。船の旅について話す機会があると、船に乗っていると電話で中断されることなく研究に没頭できるという事実を強調するようにしている。嘘ではない。自分の船室で3巻から4巻はある「明治天皇記」だとか、その後の航海では足利義政について書かれた本を数冊読破することができた。もちろん、これが理由で船に乗り、外国の港に立ち寄って過ごす二週間が楽しくなるわけではない。<sup>(45)</sup>今年もっとも圧巻だったのは、エストニアのタリン歴史地区に保存されている忘れがたい中世の街並みと、サンクトペテルブルクの見事なまでの美しさであった。<sup>(46)</sup>戦時中には日本語を身につけたおかげで日本国籍の客船で外国を巡る日がこようとは、思いもよらなかった。

<sup>(47)</sup>日本以外の国々に興味をそそられるようになったのは、日本への愛着が薄れてきたからなのだろうか。いや、断じてそんなことはない。私は旅行者であることを楽しみ、せいぜい二日間の停泊予定では物足りないと思うこともよくある。しかし、<sup>(48)</sup>私の人生は日本と密接に関わっており、この結びつきを断ち切るなど、想像することもできない。私が最後に行きつくのは、いつでも日本なのだ。

6 正誤問題

- (51) The Arts and Crafts movement **developing in** England **in** the late nineteenth century **as** a reaction **against** the arrival **of** machine-made mass production techniques, the results of which were shoddy and ugly.

本文の形を追っていくと、コンマまで前置詞句が続く。コンマから後ろは主節の内容を受ける関係代名詞 *which* の節なので、このままだと動詞がない、ということは文が成立しない。主語の後ろにある *developing* を動詞とすれば文が成立する。

(a) **developed**

- (52) Its intention was to revive craftsmanship generally and in architecture to promote traditional building techniques **used** local materials.

(a) 前文の主語「アーツ・アンド・クラフツ運動」を表す代名詞、問題なし。

(b) 補語になる名詞的用法の不定詞「～すること」。

(c) 不定詞になっている“revive”を飾る副詞。

(d) 前の「伝統的な建築技術」を飾る分詞。後ろにある名詞「地元の材料」は“use”の目的語になるはずなので、過去分詞は不可。

(d) **using**

- (53) William Morris (1834-96), the most **influence** figure in the movement, was a designer, a lecturer, a socialist, and a promoter of vernacular architecture.

最上級の前に定冠詞があるのは問題ないが、“influence”は名詞なので比較変化し得ない。

(b) **influential**

- (54) Art, for Morris, was part of life – not the domain of the rich elite: “I do not want art for a few any **fewer** than education for a few or freedom for a few.”

主語の後ろに「モリスにとって」という前置詞句が挿入してあり、*be* 動詞と補語が続く。[複数の部分があるうちの一つ]という意味ではないので、“part”を抽象名詞として使うことに問題はない。だから、(a) と (b) は大丈夫。(c) の位置に可算名詞を飾る“few”があるが、この語が表すべき複数表現が見当たらない。ということは、これを直さないとダメだ。ここでは“art”を“education”および“freedom”と比べている。否定文中の“any”の後ろなので“not ~ any more than ...”「・・・でないのは～でないのと同じだ」の構文を使う。

(c) **more**

- (55) Frustrated by the difficulty **to** obtaining good-quality, well-designed products, in 1861 Morris set up his own company, Morris, Marshall and Faulkner (later Morris and Co.).

“difficulty”に続く前置詞は“in / with / about”のいずれか。“in”を使うのがふつう。

(b) **in**

- (56) His designs for wallpapers and fabric are often highly colored and intricately **decoration**, featuring birds and flowers.

「壁紙」のデザインは1種類ではないので“wallpapers”が複数形になっていること、補語にあたる“colored”の前に「大いに」を表す副詞“highly”があることに問題はない。これに続く“and”の後ろには“colored”と並列になる補語が置かれるはず。さらに副詞では名詞を飾れないので、“decoration”の形を変える必要がある。

(c) **decorated**

- (57) His call for better design and handicraft **were** influenced by the writings of Ruskin and his belief that quality came from the relationship between a craftsman and his work, that labor should be a pleasurable activity.

文の主語は“call”。複数ではないので“were”は無理。

(a) **was**

- (58) He thought that mass production produced ugly goods, **and** in separating the maker from the product of his labor, **create** a wage-dependent working class.

(a), (b) については、“in Ving~”「~する際に」の前置詞句を作っている。問題なし。動名詞になっている“separate”の語法“separate A from B”から、このカタマリはコンマまでということがわかる。となると、前にある“and”はコンマの後ろにある“create”と何かを結んでいるはずだ。これが結び付けているものを考えると、文の[動詞]ということになる。

(c) **created**

- (59) By the 1890s, the movement **has** spread to Europe and North America.

“the 1890s”は「1890年代」、この部分に間違いはない。1890年代という[過去]の時点までに、という前置詞句になるので、[過去から現在まで]を表す現在完了は使えない。

(c) **had**

- (60) One of the most influential **building** was Red House at Bexleyheath (1859) designed for Morris by his architect and friend Philip Webb (1831-1915).

“One of”の後ろに続くのは当然複数でなければならない。

(a) **buildings**

「“Bexleyheath”は地名だろうから、前置詞は“at”じゃなくて“in”だろう」と考える向きもあるが、例えば「京都に到着する」と表現するとき“arrive at Kyoto”としても間違いにはならない。これは「京都」という都市を「到達点」としてとらえるからであり、これが「京都での活動」を暗示する文脈であれば“arrive in Kyoto”となる。問題文の(b)は“Red House”の[所在地]を表している。「空間的広がり」を考える必要のない文脈なので、“at”を使ってもなんら問題はない。

アーツ・アンド・クラフツ運動（美術工芸運動）は機械による大量生産が行われるようになったことに対する批判として 19 世紀後半にイギリスで展開された。大量生産された商品は粗悪で美しくなかったからである。

運動の意図は職人の丹念さを再び取り戻そうとすることであり、建築の分野では地元の材料を使う伝統的な建築技法を促進することであった。

この運動の主導的立場にいたウィリアム・モリス（1834 - 96）はデザイナーであり、社会主義者であり、イギリス風建築の振興者でもあった。

モリスにとって、芸術とは生活の一部であった。決して裕福な上流階級の占有するものではなかったのである。曰く「私は教育や自由と同様、芸術もごく限られた者に限られるのを望まない」

高品質ですばらしいデザインの製品がなかなかできないことを不満に思ったモリスは、1861 年自信の会社モリス・フォークナー・マーシャル商会を設立し、後にモリス商会となった。

彼のデザインする壁紙や織物はたいへんに色彩豊かで複雑な装飾が施されており、鳥や花をモチーフとしていた。

すぐれたデザインと手工芸に対する彼のこだわりは、ラスキンの著書と自らの「品質は職工とその仕事ぶりによって生み出される」、さらに「労働とは喜ばしい活動である」という信念に影響を受けたものであった。

彼は大量生産によって見るに耐えない製品が製造され、製造元とその労働者が作り出すものとのつながりを断ち切ってしまうことで、賃金のみを目的とする労働者階級が現れたのだと考えていた。

1890 年までには、この運動はヨーロッパと北アメリカにまで広まった。

もっとも特徴的な建物の一つはベクスレーヒースにあるレッド・ハウスである。これはモリスのために建築家であり友人でもあるフィリップ・ウェブ（1831 - 1915）によって設計された。

7 長文読解問題

- (61) (c) 第1段落2~3文目  
(62) (d) 第1段落3文目  
(63) (c) 第1段落4~5文目  
(64) (a) 第1段落7文目  
(65) (b) 第1段落最終文  
(66) (c) 第3段落6文目  
(67) (d) 第3段落3文目

\* 本文では“- thanks to my weakness for British mystery novels -” 「イギリスの推理小説に対する弱さ」となっている。

ここでの“weakness”は、日本語で『大好物』を表す「~に弱い」という表現と同じもの。筆者はイギリスの推理小説が「大好き」なのである。

- (68) (a) 第3段落4~5文目  
(69) (b) これはもちろん知識を問う問題ではなく、前後の流れをしっかりと捉えていれば対応できる問題。下線部の前では全寮制の学校での生活の様子が書かれており、「下線部から出てくると、イギリス紳士の世界で場所を占める準備ができています」とつまり社会人の仲間入りを果たすことが書かれている。この文がイギリス男性の成長過程を追いかける展開になっていることを考えると、社会人になる前に出てくるのは当然「学校」からである。  
(70) (d) 本文は“Children may cast it off when they step outside as easily as the dorky sweater their mother made them wear.” 直訳していくと、「子供たちはそれを脱ぎ捨てるかもしれない」「彼らが外に一歩踏み出したときに」と続く。その後ろに比較対象「間抜けなセーター」があり、使役動詞 make を使って「おかあちゃんにムリヤリ着せられた」というセーターの説明がある。セーターは比喻表現であり「イヤなセーターを脱ぎ捨てるみたいにそれを捨てる」という文意。「それ」は前文にある単数名詞“this early learning”を表す。

最初の観察。大学院生の頃、<sup>(61・62)</sup>私はマサチューセッツ州ケンブリッジにある下宿屋に住んでいた。ロシア人夫婦が所有するもので、かれらは1階のワンフロアを使って3人の子供たちと暮らしていた。夫婦同士や子供たちと話すときはロシア語で話していた。<sup>(63)</sup>彼らは英語が不得意で、話すときどきロシア語訛りがあった。しかし子供たちは、末っ子は5歳で上の子は9歳なのだが、まったく訛りのない、たいへん聞きやすい英語を話した。つまり、彼らは近所の子供たちとまったく同じ、ボストンやケンブリッジ地域特有のアクセントで話していた。彼らは外見も近所の子供たちと同じだった。両親はといえば、どこか異国風に見えるところがあった。<sup>(64)</sup>それが彼らの服装によるのか身振りによるのか、それとも顔の表情によるものか、何なのかはわからないのだが。<sup>(65)</sup>しかし子供たちの外見にはそういうところはなく、ふつうのアメリカ人の子供たちと同じに見えた。

それがわからなかった。あたりまえのことだが、赤ん坊は自分ひとりで話せるようにはならない。当然、両親から言葉を教わるのだ。しかし、その子達の話す言葉は両親が話しているものではなかった。5歳の末っ子でさえ、母親よりも英語がうまかったのである。

二つ目の観察。これはイギリスで育てられた子供にかかわるものである。<sup>(67)</sup>イギリスの推理小説に目がないおかげで気づいたことだが、上流階級のイギリス人男性は、何世代にも渡って養育に関する仮説にあてはまらない育てられ方をしている。<sup>(68)</sup>裕福なイギリス人の下に生まれた男の子は、8歳になるまでの大半を住み込みのベビーシッターや女性の家庭教師、そしておそらくは一人かふたりのきょうだいと過ごす。母親と過ごす時間はほとんどなく、父親と接する機会はさらに少ない。というのも両親の子供に対する態度は、自分たちは子供と話すべきではない、そしてもし可能であれば顔を合わせるべきでもないというものだからである。<sup>(66)</sup>8歳になると男の子は全寮制の学校に入れられ、10年過ごすことになり、「長期休暇」にしか家に帰らない。さらに、イートン校かハロー校を卒業すると、晴れてイギリス紳士の仲間入りということになる。彼の話し方や振る舞いはベビーシッターや家庭教師のものにも、あるいは自分の教わった教師のものにすら似ていない。

赤ん坊の生活では、世話をしてくれる大人が重要な役割を果たすことは疑いない。しかし、もはや我々の社会では一般に家庭内で行われているこの幼い時期の学習が成長してからのパターンを決めてしまう、とは信じられない。子供たちは外に出ると、母親にムリヤリ着せられたヘンなセーターを脱ぎ捨てるのと同じくらい、いとも簡単にそれ(幼い時期の学習で身についたパターン)を忘れ去ってしまうかもしれない。

8 空所補充問題

- (71) (b) when と Ving の間に入れるもの。定型表現 “when it comes to ~” 「～の事となると」を使う。
- (72) (a) 主語の “They” は前文と同じ “Older adults who grew up bilingual” なので、「二ヶ国語を使って年をとった高齢者」の「加齢にかかわる自然な衰退」はどうかを考える。本文第 1 段落の内容から、「衰退は少ない」ことがわかる。
- (73) (c) 第 2 段落の内容を詳しく述べなおしている段落。主語「二つの言語を使い分けること」は「精神活動の原則の一部を」どうするのか。
- (74) (b) 分詞構文の基本。
- (75) (d) 「サイモン・タスク」を説明する関係代名詞節の動詞。目的語は「認知の問題に対する反応時間」。

カナダの研究者によると、脳の若さを保つという点で、一ヶ国語しか使わないよりも二ヶ国語を使うほうが好ましいということである。

調査結果では、二ヶ国語を使って年齢を重ねた高齢者は、テストの際一ヶ国語しか話さない人たちよりも頭の回転が速かった。加齢によって起こる自然な能力の減退が少なかったのである。

研究者たちによると英語とあわせてタミル語かフランス語のどちらかを使って成長した人たちをテストしたところ、二つの言語を使い分けることで脳の順応性が保たれ、加齢のために生じる精神活動の減退の一部に歯止めがかかるのだらうということがうかがえた。

カナダにあるヨーク大学のエレン・ピアリストックとその同僚たちが 6 月に “Psychology and Aging” 誌に執筆した論考によると、単一言語使用者、二ヶ国語使用者合わせて、30 歳～50 歳の中年 104 名、60 歳～88 歳の高齢者 50 名を対象に検査を行った。

彼らはサイモン・タスクと呼ばれる検査を用いたが、これは、例えばコンピュータのスクリーン上に表示される色のついた図形の場所を判断するといった、認知問題への反応速度を測定するものである。

ピアリストックの報告によると、どちらの年齢層でも二ヶ国語使用者の方が速い反応速度を示したということである。